

地域で取り組む熊野牛の改良と生産性向上対策

紀北家畜保健衛生所

○高橋康喜 黒田順史

柏木敏孝

【背景・目的】

和歌山県では年々畜産農家戸数が減少し、各市町村に数戸の畜産農家戸数となり、地域での畜産農家の組織的な活動がほとんど行えなくなっている。繁殖和牛農家についても、県内で飼養される黒毛和種を熊野牛と命名し熊野牛振興を行っているが、当管内では各市町村に1戸程度の飼養戸数となっている。そのような中、繁殖和牛農家が自主的に組織化を行い、関係団体の協力を得て紀北和牛改良組合（以下組合）を設立し、熊野牛の改良や生産性向上対策等に取り組んできたので、それらの効果について検証を行った。

【取り組みの内容】

組合は平成22年2月に紀北家畜保健衛生所（以下家保）管内の5市町村の計10農家により設立され、翌平成23年4月に県名で初めて公益社団法人全国和牛登録協会（以下登録協会）に認定された和牛改良組合となった。平成25年2月1日現在では、11農家249頭の繁殖雌牛の飼養状況となっている（表1）。組合では熊野牛の改良や生産性向上対策のため、家保の指導・助言のもと以下の活動を実施している。

① 牧場巡回（各組合員・肥育農家）

組合員が飼養する繁殖雌牛の情報共有化や飼養管理方法等の意見交換を行うため、各組合員の牧場巡回を実施するとともに、組合員の出荷した素牛を導入した肥育農家の牧場視察

② 勉強会・研修会の開催

主に育種価評価や改良の考え方などについて、家保や登録協会等を講師に招き勉強会や研修会を実施するとともに、先進地の子牛市場や全国和牛能力共進会予選、枝肉市場などを視察

③ 共同作業の実施

生産資材や優良凍結精液の共同購入及び共同削蹄枠の導入

【家保による指導】

家保では組合設立以前より、繁殖和牛農家を集めて家保主催の改良や疾病対策、組織活動の有用性などの研修会を開催してきた。組合設立後も組合主催の勉強会・研修会に対して講師や職員を派遣するとともに牧場巡回には職員が同行し、育種価評価や血統情報を活用した改良への助言、防疫指導を実施してきた。また、生

産性向上対策のため、熊野牛子牛育成マニュアルに沿った子牛疾病予防プログラム（図 1）の推奨、飼養衛生管理指導等を実施し、近年全国的に問題となっている牛白血病に対し、家畜の伝染病に対する防疫体制の確立事業を活用した検査を実施し、浸潤対策や計画的な自主とう汰等の指導を行ってきた。

【取組の効果】

登録協会の実施する登録頭数について、組合設立前後では外部導入の雌牛が半数以上を占めていたが、現在ではほとんどが組合内保留となった。また、改良の目安となる基本・本原登録審査点数が、組合内保留牛で平成 20 年度に 80.2 点であったものが平成 24 年度には 81.1 点（全国平均 80.9 点）となった（図 2）。組合員出荷の子牛については、日齢平均体重、kg 単価で平成 20 年度には 0.96kg/日、1,268 円/kg（県平均 0.99kg/日、1,245 円/kg）であったものが、平成 24 年度では 1.05kg/日、1,529 円/kg（県平均 1.02kg/日、1,443 円/kg）となった（図 3,4）。また、動力噴霧器等の消毒機器が不十分であった組合員が家畜伝染病防疫強化事業を利用し消毒機器の整備が行われた。子牛疾病予防プログラムを実施した組合員においては、斃死頭数割合が平成 20 年度の 6.7%から平成 24 年度の 2.0%に減少する一方で、十分に子牛疾病予防プログラム実施しなかった組合員では、斃死頭数に大きな減少はなく平成 24 年度では 8.9%と高い割合となった（図 5）。牛白血病の検査では、平成 23、24 年度に 11 頭の繁殖雌牛の抗体陽性が確認されたが、10 頭は自主とう汰され、残る 1 頭も隔離飼育を行い、平成 25 年度の検査では、抗体陽性牛の子牛も含め検査した 130 頭全ての抗体陰性が確認された（図 6）。

【考察・課題】

改良面では、組合内保留牛の登録点数が伸び全国平均を上回るなど改良の成果が出てきている。そのため、組合設立前後では外部導入に頼っていたものが、現在ではほとんどが組合内保留となっている。また、登録協会の認定組合となったことで、選抜制の高い本原登録が可能となり、組合員も本原登録されることを一つの目標としており、改良の一役を担うこととなっている。子牛出荷成績については、日齢平均体重が年々改善されるとともに、価格の面でも購買者である肥育農家から評価されてきている。子牛の疾病については、年毎に疾病の流行状態が異なるため発生自体の減少には至っていないが、斃死頭数の減少につながっており、子牛疾病予防プログラムの実施により重症化することを防いでいると考えられる。しかし、労力の面などで十分に子牛疾病予防プログラムを実施できていない組合員もあり、家保としても今後指導を強化していく必要があると考えている。牛白血病については、

積極的に自主とう汰や隔離飼育など行うなどして、組合内に浸潤する前に対策を行えたことが陽性率を引き下げることとなったが、今後も継続的に検査を実施し、清浄化に努めていく必要がある。

繁殖和牛農家が家保の指導のもと自主的に組織化を行い、定期的に牧場巡回や勉強会などを実施することで、組合員同士の意見交換や情報の共有化することができ、積極的に組織として取り組みを行ったことが、明確な効果につながったのではないかと考えられる。個々の農家では自分の牧場の問題点がいまひとつ理解しにくいこともあるが、組合員同士が常に話を行ったり、他の組合員の牧場と比較したりすることで、個々の牧場の問題点、ひいては組合全体の問題点がはっきりし、家保の指導にも積極的に取り組めたと考えられる。今後の課題として、子牛出荷成績や斃死頭数など組合員間で差が出てきており、その差を埋めていくよう家保としても指導していく必要がある。また、繁殖成績の改善や組合として繁殖雌牛共励会の開催及び全国和牛能力共進会への出品等の目標を掲げており、家保も協力してその活動を支援していきたい。